



愛隣幼稚園・・・・・・・・・・・・・・・・

園だより

・・・・・・・・・・・・・・・・ 11.3月号

愛隣っ子を送りだします

1年はあっという間に過ぎていきます。「くろーばー組」が誕生してからもう1年が過ぎようとしているのです。あの時にはこの人たちが大きい組とは・・・などと失礼なことを思っていました。ごめんなさい。大きい組の存在感は卒業を目前にやはり今年も確かなものになっています。今朝、年長組は時差登園。先に登園した年中のお母さんが「静かですね～卒業式の後ってこんな感じなんですね～」としみじみおっしゃっていました。年長は2階ですから実際には朝の登園時間帯はそんなに姿が見えるわけでもなく、声が聞こえているわけでもありません。だから何が違うっていうわけではないのですが、今朝の幼稚園は確かに静かでした。おもしろいものです。気配がないという事がよくわかるのです。目には見えなくても確かにあるという存在感。そこにいてくれる安心感。それはきっと2年・3年という長い時間の中で生まれ、愛隣という大地の中にしっかり根付いたものなのでしょう。

友だちはいいもんだ という歌があります。私が小学生の時、初めて歌って大好きになりました。

友だちはいいもんだ 言いたい事が言えるんだ 悲しい時は励ましあおう 心はひとつさ

おとなになっても 忘れはしない 夢を大事に 君と進もう みんなはひとりのために

ひとりみんなのために みんなはひとりのために ひとりのために (これは2番の歌詞)

私たちは、子どもたちの愛隣生活を通じて「あなたはあなたのままでいい」「みんながっていい」「仲間がいい」ということを様々な経験を通して実感すること、そう思える心の育ちを願って子どもたちに向き合っています。ですから、自分のやりたい事を見つけ、仲間とその楽しさを分け合うあそびを大切にします。夢中になって時間を惜しんで遊びこんでほしいと思います。その中で子どもたちは自分に思いがあるように、友だちにも思いがあることを知ります。だからぶつかり合う。わかりあえない事にいらだち、戸惑うこともある。ちがうことはいいことだと、始めは思えない。何度もぶつかり合い戸惑いながら、次第に仲間のいいところが見えてくる。認め合う仲間になる。お互いにいいところも、ちょっと好きになれないところも含めて。こうなって初めて、自分はいいい、自分と違うあいつはいいい、仲間っていいということを実感できる。ここまでするには時間が掛かります。愛隣では幼稚園時代のほとんどがこの事に費やされるかもしれません。一方でよくあることですが、早く目に見える成果を得たい大人は「お友達と仲良くしなきゃだめでしょ」なんて言ってみる。大人が準備したバイパスを通った子どもたちにこの実感は得られないのに。しかしこのやり方で即席の『友だちもどき』は出来あがる。その目に見える『友だちもどき』を大人が確認し、「よしよし友だちができた」と安心している。それは本物ではなく『もどき』なのに。慌ててはいけません。近道もだめです。通るべき道と費やさなければならぬ時間があるのです。ひとりひとりその距離も時間も違います。そして、成果は目に見えにくく評価も難しい。それでも、時間をかけ、心を配り、ねがいを込めて育まれたものは、大木を支える根のように地中深く広がり、やがて地上に芽を出し、伸びてゆく若木を支える確かな力になると、私たちは確信しています。

春、愛隣という大地に根付いた株から新しい芽が芽吹きます。「仲間がいい」と知っている君たちだから、きっとまた新しい仲間を創り出す人達になってくれる。人の中で人を生かし、人に生かされ、またそこで「仲間がいい」と喜べる。そんな愛隣っ子たちを今年も送り出せることは、私たちの大きな喜びです。そしてまた新しい仲間を迎えて、目には見えないけれどかけがえのないものを大切に育てていきたいと願っています。